

令和五年度

国

語

注

意

- 1 問題は1ページから5ページまであり、これとは別に解答用紙が1枚ある。
- 2 解答は、全て別紙解答用紙の該当欄に書き入れること。

(一) 次の文章を読んで、1～8の問いに答えなさい。(1)～(12)は、それぞれ段落を示す番号である。

- ① 共感という経験は対人関係における感情共有の確信であり、共感が生じると多くの場合、相手に対して親和的な感情が生じ、他人事ではないと感じられる。喜びへの共感であれば、自分のことのようにうれしくなり、「よかったな」と声をかけるだろう。悲しみへの共感であれば、涙があふれ、慰めるであらうし、苦しみに共感すれば、助けてあげたいと感じ、助力を惜しまないことも少なくない。
- ② このとき、自己了解(自己の感情への気づき)と同時に、他者の感情了解が生じている。自己了解が「自分がどうしたいのか」という欲望を告げ知らせる以上、共感とは「他者がどうしてほしいのか」を理解し、相手が望む行為の選択を、つまり利他的行為を可能にするのである。
- ③ A、自分の感情と相手の感情が同じであるという保証はない。だが、私たちは共感を手がかりにして、相手に気持ちや望みを言葉で確認することができるし、それによって適切な対応を取ろうとする。そうやって経験を何度も積み重ねるほど、次第的に外すことなく相手の感情を理解できるようになり、適切な対応が可能になる。
- ④ こうした理解力を培うには、言葉と想像力、推論する理性の力を身に付けることが必要である。それは、人間の共感を動物の共感と区別する上でも重要なものだとと言える。
- ⑤ 人間と動物の共感の大きな違いは、言葉で相手の気持ちを確認できることだ。共感とは自分の感情が同じであるという確信だが、言葉がなければ、その確信が正しいかどうかを知ることができない。言葉があるからこそ、共感が勘違いだった場合に確認できるし、正解だったと喜ぶこともできる。そして、こうした自分の共感による他者理解が正しいのか間違っているのかを知る、というフィードバックの経験が繰り返されることで、私たちの共感の精度(当たっている確率)は高くなる。言葉による相互理解がなければ、共感とは他者理解に陥ってしまう可能性があるのだ。
- ⑥ また、言葉の使用は、人間に独自の意味の世界の共有をもたらししている。言葉は感情を細分化するため、共感される感情も微細に区分され、微妙な感情の違いの共有をも可能にする。
C、人間は、嫉妬や恥、羨望のような自我に関わる感情もあるため、さらに共感の対象は複雑になる。たとえば、怒りや苦しみは動物にも共感できるかもしれないが、嫉妬や羞恥心、自尊心に関する共感が生じることはないだろう。それは自我のある人間だけがもつ感情であり、言葉による感情の細分化を経ているからこそ生じ得るのだ。
- ⑦ 人間の場合、想像力と推論する理性の力によって、さらに複雑な共感が可能になる。
- ⑧ 私たちは目の前の世界を生きているだけでなく、実在しない架空の世界、ずっと先の未来の世界にも想像の中で生きることができる。様々な記憶をたどり、知識を駆使して予想し、推論し、多様な状況を想像することができるのだ。このような想像的な世界もまた、言葉によって分節された意味の世界に基づいている。
- ⑨ こうした想像力、推論する力は、当然、他者の内面世界にまで及び、私たちは他者の内面を想像し、他者の状況を考慮することで、他者の感情や思考を推理することができる。そして、他者の感情や思考、価値観の中に自分と同一なもの、重なるものを見いだせば、共感が生じることになる。それは、感情が同期してリアルにその感情状態に没入する情動的共感とは異なり、相手との同一性を認識することで感じる認知的共感であり、自我がめばえ、言葉が使えるようになり、想像力、推論する理性の力が形成された段階で生じる、人間に特有な共感なのである。
- ⑩ 共感とは相手に対して親和的な感情を生み、相手のための行動を引き起こす。共感が道徳的行為の動機となるのもうなずける。困っている人、苦しんでいる人に共感すれば、そこから同情や憐憫などの感情が二次的に生じ、助けなければ、慰めなければ、という行動が生じ得る。この点は認知的共感も情動的共感も変わらない。サルやイルカ、クジラも苦しんでいる仲間に共感し、助けようとする。まだ言葉を使うことができず、想像力や理性の力の弱い幼児でも、泣いている子を慰めようとする。想像力や推論する力が必要な認知的共感ではなく、感情が同期するだけの情動的共感であっても、利他的行為は引き起こされるのだ。
- ⑪ ただし、認知的共感とは利他的行為をより適切な方向へ導く力をもっている。自分の中に湧き上がった感情に衝き動かされるだけでなく、相手の立場、状況を考慮して行動できるからだ。また、情動的共感ほど熱くならず、比較的冷静に対処することもできる。
- ⑫ 共感とは人間にとって、利他的行為、道徳性の動機となる、とても大事な現象なのである。

(山竹伸二「共感の正体」による。)

(注1) フィードバックは行動や反応を、その結果を参考にして修正し、より適切なものにしていくこと。
(注2) 同期はここでは、自分と相手の感情が一致すること。
(注3) 憐憫はあわれむこと。

1 [1]段落の——線 a「に」、b「の」、c「ば」、d「を」の助詞の中から、種類の異なるものの一つを選び、その記号を書け。また、一つだけ異なるものの助詞の種類として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

2 [5]段落の——線②「相互」と熟語の構成(組み立て方)が同じものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。
異なるものの記号: C

ア 格助詞 イ 副助詞 ウ 接続助詞 エ 終助詞
 助詞の種類の記号: ウ

3 [3]段落の [A]、[6]段落の [C] にそれぞれ当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア (A) あるいは C (そこで) イ (A) ところが C (または)
 ウ (A) そのうえ C (むしろ) エ (A) もちろん C (しかも)

4 [5]段落の——線①「人間と動物の共感の大きな違いは、言葉で相手の気持ちを確認できることだ。」とあるが、人間の共感において、言葉の使用により可能となることについて、本文の趣旨に添って説明した次の文章の [a]、[b] に当てはまる最も適当な言葉を書け。ただし、[a] は、[5]・[6]段落の文中から二十九字でそのまま抜き出し、その最初と最後のそれぞれ五字を書くこと。また、[b] は、[5]・[6]段落の文中から十一字でそのまま抜き出して書くこと。**a・b: 解答欄参照**

人間は、言葉を使うことで、[a] ことができ、その繰り返しで共感の精度が高まる。また、[b] によって、人間は、微妙な感情の違いや自我に関わる感情を共有することが可能になる。それは、人間に独自な意味の世界の共有であり、動物に比べて共感の対象が複雑になる。

5 [5]段落の [B] に当てはまる最も適当な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。
 ア 模範的 イ 独善的 ウ 積極的 エ 義務的

6 [7]段落の——線③「人間の場合、想像力と推論する理性の力によって、さらに複雑な共感が可能になる。」とあるが、「想像力と推論する理性の力」によって「さらに複雑な共感」が生じる過程を、

[8]・[9]段落の文中の言葉を使って、五十字以上六十文字以内で書け。**解答欄参照**
 7 [10]・[11]段落に述べられている、情動的共感と認知的共感の共通点と相違点をまとめた次の表の [a]、[b]、[c] に当てはまる最も適当な言葉を、[10]・[11]段落の文中から、[a] は五字で、[b] は七字で、[c] は十一字で、それぞれそのまま抜き出して書け。**a: 利他的行為 b: 冷静に対処する c: より適切な方向へ導く力**

共通点	相手のための行動、つまり、[a] を生じさせ、道徳的行為の動機となり得る。
相違点	自分の中に湧き上がった感情に衝き動かされるだけの「情動的共感」による行動と比べて、「認知的共感」による行動においては、相手の立場や状況を考え、[b] ことが可能である。このことから、「認知的共感」には、[a] を、[c] があるとと言える。

8 本文に述べられていることと最もよく合っているものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

- ア 人間は他者の様々な感情に共感するが、嫉妬や怒りは喜びと比べてより大きな共感を生じさせる。
- イ 人間は他者の感情状態に没入すると自我がめげばえ、実在しない架空の世界を認識するようになる。
- ウ 共感とは相手と自分の感情が共有できているという確信であり、相手に対して親和的な感情を生む。
- エ 共感とは自己了解と他者の感情理解の二つの側面があり、幼児や動物には起こり得ないことである。

(二)

1 次の1～4の各文の——線の部分の読み方を平仮名で書きなさい。
 2 物語の梗概を話す。 **こうがい**

3 意見に隔たりがある。 **へだた(たり)**
 4 梅のつぼみが綻びる。 **ほころ(び)る**

(三)

1 次の1～4の各文の——線の部分を漢字で書きなさい。ただし、必要なものには送り仮名を付けること。
 2 国民しゆくしやに泊まる。 **宿舍**

3 ようさん農家が桑を栽培する。 **養蚕**
 4 いさましい姿に感動する。 **勇ましい**

逆らう

(四) 次の文章は、明治時代の東京を舞台としており、内務省土木局の技師で建築家の「妻木」が、自ら現場を監督・管理する立場として建築に携わった大審院（現在の最高裁判所に当たる。）を、妻の「ミナ」に見せようと話しかける場面から始まっている。これを読んで、1〜5の問いに答えなさい。

「出掛けないか、少し。」

庭に水をまいていると、声が掛かった。縁側でくつろいでいた妻木が、新聞越しにこちらを見ている。

「どちらへ。」

「なに、すぐそこさ。」

栃木の仕事に一段落つけて、東京に戻って二日目のことだった。庭では山茶花が燃えるように咲き、落ち葉を掃く音がそこそこに立っている。

「着物もそのままでもいい。すぐそこだから。」

重ねて言われ、ミナは小走りに家に入って、割烹着を脱いだ。髪を整え、薄く紅を引く。廊下に出ると、すでに妻木はシャツの上に外套を羽織って、玄関口に立っていた。

「私、こんな普段着でよろしいのかしら。」

「ああ。ちよいと歩くだけだ。」

そう答えたのに、妻木は日枝神社から溜池のほうへと歩を進めるのだ。

「近くじゃございませんの？」

「そんなに歩きはせんさ。」

彼は背を向けたまま言い、けれどそれから二十分ほど黙々と歩き続けた。溜池から葵橋を過ぎ、彦根井伊家の上屋敷の方角へと向かう。遠出するならそれなりの格好をするのに、と夫を恨めしく思う。どこへ行くのか見当もつかないまま仕方なくついていくと、やがて平坦に舗装された、まるで大河のように幅の広い道路に出た。桜田通りだ。

「あの……どちらへ。」

言いさして、「あ」と息をのむ。

目の前に途方もなく大きな洋風建築物が現れたのだ。

赤煉瓦が鈍色の光を受けて、柔らかに景色に溶け込んでいる。石がアーチ状に積まれて窓をかたどっている。貴婦人のように凛と美しいたすまいなのに、どこか親しみやすく、温かみすら感じる建物だった。

「これ……大審院ですね、昨年完成したという。」

建物を呆然と見上げて、ミナはつぶやいた。

「ああ。君にも見せておきたいと思って。」

「なんて立派なこと。それに、本当にきれいだ。」

感動を表すのに月並みな語彙しか浮かばないことに焦れつつも、夫が自分の知らないところでこれほどの大仕事を成し遂げたのだと思えば誇らしく、同時に恐ろしくもあった。彼がまた少し遠くに行ってしまったような心細さも覚えた。

「この建物は僕の設計じゃあないんだ。そら、いつとき留学していたドイツの、エンデという建築家の作品だ。ただ、意匠は多少造り替えた。日本ならではの装飾を織り込んでみたくてね。」

②「日本風の装飾に？」

「ああ。西洋の柱に大瓶束なんぞを合わせてみた。天井にも海老虹梁のような日本の伝統的な装飾を施してね。エンデが見たら、さぞ驚くだろうな。」

「でも、現場の職人はみな賛同してくれただ。彼らがいなければ、そんな意匠にすることはかなわなかった。僕は紙の上で図面を引くことしかできないが、彼らはそれを実際に形にしてくれる。本当にすばらしいよ。」

先だつて鎗田が漏らした局内での確執のようなものを、今横にいる妻木の表情から感じ取ることとはできなかった。彼は濁りのない健やかな笑みを、大審院に向けている。その笑みに、哀しい影は見えない。ただただ、自らの仕事を愛おしみ、楽しんでる顔だった。

——この人はきつと、自分の役目に救われているのだ。建築家という仕事に。

心の底から安堵した。同時に、私がどう支えても、こんな笑顔にさせることはできなかったな、と不甲斐なさも覚える。

「君が以前、言ったことがあったね。」

不意に言われて横を見上げると、日に焼けた顔に白い歯をのぞかせて、夫がこちらを見つめていた。

「江戸には、いいところがたくさんあったのに、って。みんなおとぎ話のようだった。」

「……ええ。」

一緒にあってしばらく経った頃だ。こんなふうには散歩に出たとき、どんどん変わっていく街並みが寂しく思え、ついAのだ。

「こうして、西欧風の建物が建ってしまうと、江戸の頃はまた遠くに行っちゃまうような気がするかもしれない。国の機関はどうしても、機能を重んじる向きがあるからね。だが、僕が設計するからには、新たな技術を取り入れながらも、この国の、自分たちの根源を忘れずに引き継いでいくような建物にしたいと思っている。そういう建物がいくつも建つことで、江戸のような、心地いい街並みがきつとできる。子供たちの、またその子供たちの世代まで、誇りになるような街がね。」

妻木はそこで、再び大審院に視線を戻した。
③「哀しい思いをするのは、もうたくさんだろう？」
え？ と喉元まで出掛かった声を、すんでのところでミナはのみ込んだ。

「私が、哀しそうに見えたのだろうか。江戸に生まれ育った者が抱く喪失感を、夫は私の中にも見ていたのだろうか。」

これまでふたりで歩いた道程が、目の前に浮かんでは消えていく。
「いい街にするよ、必ず。」

妻木は静かに宣して、大審院に向かって大きく伸びをした。

(木内 昇「剛心」による。)

(注1) 外套＝オーバーコート。(注2) 意匠＝裝飾に関するデザイン。(注3) 鎗田＝妻木の同僚。
(注4) 確執＝もめごと。(注5) 宣して＝宣言して。

1 文中のAには、「無意識に言った」という意味の言葉が当てはまる。Aに当てはまる最も適当な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア 口走った イ 口籠もった ウ 口を出した エ 口を合わせた

2 線①「月並みな」と同じ意味をもつ言葉として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア 上品な イ 稚拙な ウ 平凡な エ 容易な

3 線②「日本風の裝飾に？」について、次の(1)、(2)の問いに答えよ。

(1) 文中には、ミナが、大審院に対して、洋風の建築物が最も出す気品のある雰囲気を感じる一方で、なじみのある身近なものに対して抱く感覚を覚えていたことがわかる一文がある。その一文として最も適当な一文を、線②より前の文中から抜き出し、その最初の三字を書け。貴婦人

(2) 妻木は、洋風の建築物である大審院に日本の伝統的な裝飾を織り込むことで、大審院をどのような建物にしたいと考えたのか。線②より後の文中から二十五字以上三十字以内でそのまま抜き出して書け。この国の、自分たちの根源を忘れずに引き継いでいくような建物にしたいと考えた。

4 線③「哀しい思いをするのは、もうたくさんだろうか？」とあるが、妻木が考えたミナの「哀しい思い」と、妻木にこのように言われたときのミナの心情について説明した次の文章のa、bに当てはまる適当な言葉を書け。ただし、aは、文中の言葉を使って、二十字以上二十五字以内で書くこと。また、bは、最も適当な言葉を、文中から十六字でそのまま抜き出して書くこと。

妻木は、ミナの以前言った言葉から、ミナが、a ことに対して哀しい思いを抱いていると考えていた。そのことを気遣うような妻木の言葉を聞いたミナは、自分ではあまり意識していなかった、b を、妻木が感じ取っていたことに戸惑っている。 a、b 解答欄参照

5 本文についての説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア ミナは、建築家として成功を収めている夫を誇りに思う一方で、妻である自分のことを顧みることなく、仕事に夢中になっている妻木を前に、自分の存在価値を見いだすことができずに苦しんでおり、その胸の内を妻木に打ち明けようと試みるものうまくいかず、やりきれない思いを募らせている。

イ ミナは、建築家としての仕事を愛おしみ、大審院のことを笑顔で話す妻木を見て安堵しつつも、自分はそのような笑顔を引き出せなかったことを妻として情けなく思っていたが、実は妻木はミナの思いを受けとめてその思いに応えようとしていたことに気づき、今までの二人の歩みを思い返している。

ウ 妻木は、現場の職人たちの協力を得て、ドイツ人の建築家が設計した建築物にこっそりと手を加え、遊び心をもちながら純粹に自分の理想とする建築を追求しようとする一方で、何とかして自分の功績を後世に残そうと奔走しているが、ミナは、そのような妻木のことを夫として頼もしく思っている。

エ 妻木は、自ら手掛けた大審院のできればに満足し、これからの建築に新たな技術を取り入れることで、東京を後世まで誇りに思える街にしようという決意を新たにしているが、ミナは、建築のことに関心をもてず、妻木のことを心強く感じる一方で、妻木が遠く離れていくような心細さを感じている。

(五) 次の文章を読んで、1～3の問いに答えなさい。

鶴丸翁(注1)の知る浪花(注2)の人、石見国(注3)に行きたりしに、何かは知らねど、あたりなる梢(注4)に鳥のこぼこぼと鳴きけり。遊び居たる童(注5)が、老婆(注6)に、呼子鳥(注7)のまた鳴くよと告ぐるを、かの浪花人はやく聞きつけて、老婆に、「童の言ひつる呼子鳥といふは、今、梢にこぼこぼと鳴くなる鳥のことにや。」と尋ねしに、「いかにもさなり。」と答へけり。「呼子鳥といふ名は昔より物に見えたれど、何といふこと定かならぬを、今、童のかく言へるはこのあたりにては、常に言ふことか。」と問ふに、「めづらしくも尋ねたまふものかな。この所にては童までもよく知りて、言ふになん。」と答ふるに、「さらばその今鳴く鳥の梢はいづこなりや。姿もよく見置きて、友のつとにも語らん。」と請ひけり。老婆、「あな、むつかしきことのためふ人かな。ひなの、羽(注8)ならはしに出でて、おのが巢(注9)にかへる道にまどふを、親鳥の、巢より呼ぶをおしなべて呼子鳥とは言ふなれば、これの鳥のみをしへまゐらせて、何にかはしたまはん。」と答へけり。はじめて呼子鳥は「つ鳥にあらざりけりと、さとりたるよし語りけるとぞ。」

〔紙魚室雑記〕による。

(注1) 鶴丸翁〓人名。 (注2) 浪花〓今の大阪市およびその付近。
 (注3) 石見国〓今の島根県の西部。 (注4) つと〓旅の土産。 (注5) 羽(注8)ならはし〓飛ぶ練習。
 (注6) おしなべて〓全て。

- 1 線②「をしへまゐらせて」を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書け。おしえまゐらせて
- 2 線①「童のかく言へるは」は、「童がどのように言ったのは」という意味であるが、童はどのようなことを言ったのか。童が言った言葉を、文中から六字以上十字以内でそのまま抜き出して書け。
- 3 次の会話は、この文章を読んだ愛美さんと康太さんが、先生と一緒に、浪花人と老婆のやり取りについて話し合った内容の一部である。会話の中の a、b、c に当てはまる適当な言葉を書け。ただし、a は十字以上十五字以内、b は二十字以上二十五字以内の現代語で書くこと。また、c は十二字で、最も適当な言葉を文中からそのまま抜き出して書くこと。解答欄参照

愛美さん 「浪花人は、呼子鳥にとても強い興味を示していたけれど、どうしてそれほどまでに興味をもったのでしょうか。」

康太さん 「浪花人は、呼子鳥については、『a』程度で、どのような鳥かわかっていなかった」と話していましたね。」

先生 「呼子鳥は、この頃の知識人にはよく知られていて、古くは、『万葉集』や『古今和歌集』にも登場しています。浪花人は、それほど有名な鳥なのに、よくわかっていなかったから、興味をもったのでしょうか。」

愛美さん 「浪花人は、呼子鳥を鳥の種類の一つだと思っていたようですが、実はそうではなくて、『b』を全て呼子鳥と言うのだと、老婆は言っていましたね。」

康太さん 「だから、老婆は、呼子鳥の姿をよく見たいと言う浪花人のことを、『c』だと思っただけですね。」

a. 名前を昔から何かで見ている b. 飛ぶ練習に出て帰り道に迷うひなを、巢から呼ぶ親鳥

c. むつかしきことのためふ人

全 日制
科
受 検 番 号
号
氏 名

令和五年度 国 語 解 答 用 紙

(一)										問 題		
8	7		6			5	4		3	2	1	解 答 欄
ウ	c	b	a	イ			b	a	エ	ア		
	より適切な方向へ導く力	冷静に対処する	利他的行為	<small>(という過程を経て、さらに複雑な共感が生じる。)</small> 他者の内面を想像し、状況を考慮する。その感情や思考の価値観の中に自分と同一なものを見いだす。			言葉による感情の細分化	最初 自分の共感				異なるものの記号 C 助詞の種類の記号 ウ

(四)						問 題	
5	4		3		2	1	解 答 欄
イ	b	a	(2)	(1)	ウ	ア	
	江戸に生まれ育った者が抱く喪失感	西風の建物が増え、江戸の街並みが変わった。	この国の、自分たちの根源を忘れないように建物を継いでいく。	貴婦人			

(五)					問 題
3			2	1	解 答 欄
c	b	a	呼子鳥のまた鳴くよ	おしえまいらせて	
ふむつかしきことのため	呼ぶ親鳥	飛ぶ練習に出る、巣から	名前を昔から何かで見		

(三)				問 題
4	3	2	1	解 答 欄
勇ましい	逆らう	宿舎	養蚕	

(二)				問 題
4	3	2	1	解 答 欄
ほころ	へだ	こうがい	とうじょう	

問題	得点
(一)	
(二)	
(三)	
(四)	
(五)	
作文	
合計	